光明

第十卷第十號

慈は卽ち如來なり
慈は卽ち大乘
大乘は卽ち慈
慈は卽ち如來なり
善男子慈は一切菩提道
菩提道は卽ち如來
如來は卽ち慈なり。

【大般涅槃經】

大眞日本宗 光明團本部發行

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光明 第拾卷第十號 【定價 金拾錢】

◆合掌宣言

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に惱む、されど、傷き痛み惱める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ曾無一善唯一作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親、罪惡深重煩惱熾盛の我を共まゝ救ひ給ふ。

第三、惠まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘ましき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞かせん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、希くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生きん。

第五、「四海の信心の人は皆兄弟」其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、篤勵して、相愛に生きん哉。

◆本領

毀譽褒貶に動ずるなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救濟のために、熱と血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、混亂の社會に猛進せよ。

◆卷頭の叫び◆

白銀の明鏡東の山をはなれ
天空、黑く澄んで、星まばらなり。
白露光る所、虫の音、天の樂を地に奏す
これを眺め、これを聞きこれを喜ぶ者幾人かある。
久遠の眞如の月一切群生の上に光る。
これを眺め、これを嘆美する者幾何、
獨り月下に合掌し、念佛す。
この心寂しく、この心哀れなり。
噫。何ぞ薄俗非急の凡事に囚はれて、
この明鏡を仰がざる者の多き、
友はあらざるか、
一人見んにはあまりに尊きにすぐ。（九月廿六小用の濱にて）

西岸招喚

住岡狂風

前號迄の大略……一人の旅人がある。誰一人ゐない無人の曠野を西に向つて旅を急ぐ、忽ち前に、左に火の河と右に水の河と其の中間に幅四五寸の白道があらはれる。後からも横からも群賊惡獸があらはれて追ひかける。彼は全くゆきつまる。其時、東の岸に、大善知識釋尊の敎へ、「汝決定して此の道をたづれて行け、必ず死の難なけん、若しとゞまらばすなはち死せん」のやりごゑを聞いて、はじめて白道にむかつてすゝむ……

本文

『又西岸上に人有つて喚うて言はく、汝一心正念にして直ちに來れ、心能く汝を護らん、衆て水火の難に壓せんことを畏れざれと。』

二尊不二

行詰つた旅人は、はからずも東岸火宅に應現ましました釋尊の、「行けよ」の發遣を聞きました。しかしその發遣は單なる敎示ではありません。それはそのまゝ本佛の勅命を指ざすものでありました。これは同時であります。西岸上の本佛彌陀の招喚の聲は善知識の敎へを聞いた時はじめて聞ゐるのであります。同時ではありますが、同時であるまゝに前後があります電燈のスイッチを入れるのと光がさすのは同時でも、でも同時だからとて光を先きにともすことは出來ません。スイッチが先であります。善導大師が發遣を先きにせられた所以であります。勿論、彌陀の本願力が釋尊の上に勸讃を生じたものであります。これは法の上からの見方であります。救はれる凡夫の立場から云ふならば、釋尊の言敎を通さないでは絶對に彌陀の願力を信ずることは出來ませぬ。

多くの同行は說敎を聞きつゝも聞く善知識の云葉をば、單なる言葉と棄てゝしまつて、一人心中に信人を堅めようとする者があります。いくらたつても出來よう筈があ

りませぬ。眞に師敎を尊んずる者がやがて師敎を起にて本佛のみ心を信じさせて頂くことが出來ます。

釋尊だけではありません。次第相承の善知識は、皆その信の窓を通して久遠の如來の願心へと目覺めてゆかれました。さうして如來の悲懷の眞髓を信知してこれを云葉になほして殘して下さつたのであります。我等は親鸞聖人のみ敎を通して釋尊の眞意を知り、あざやかに彌陀弘誓の本願を信じさせて頂くのです。ですから善知識たる釋尊は彌陀をはなれてはありません。彌陀の本願も釋尊をはなれては衆生の上に輝く日はありません。ですから二尊は全く不二の關係であります。

今宿善全く開發して本佛の招喚の聲は行者の胸中に信心の華と咲いてゆきます。

有人

『西岸上に人有つて喚うて言く……』

愚禿鈔には「西のきしのうへにひとありてよばうていはくとは阿彌陀如來の誓願なり。」とあります。

阿彌陀佛は永遠に現在の佛であります。今現在成佛……その現實の救主、大音宣布の願意を阿彌陀經には『今現在說法』と說いてあります。「有人」とは實にこの本願所成の覺体、阿彌陀佛をさすのであります。

この彌陀の生命は本願にきはまります。本願が如來の宗敎、生命であり全体であります。所謂第十八願こそ如來の本願であります。

『設行我佛を得たらんに十方衆生至心に、信樂して、我が國に生れんと欲はんに、若し生れずば正覺を取らじ、唯五逆正法を誹謗せんをば除く。』

この願文の全体が、如來の招喚の全体であります。『汝一心正念にして直ちに來れ我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことをおそれざれ。』との勅命もそれはこの本願文の精神を鮮かに出されたのにすぎません。

二河譬の上では、願力の白道と、西岸の勅命とは二つでありますけれど、法体から申せば、願力の白道も南無阿彌陀佛であり、招喚の勅命も南無阿彌陀佛であります。今この『汝一心正念にして……』の勅命も、南無阿彌陀佛の意譯にすぎません。旅人は今、本佛の久遠の本願に遇ふたのであります。この本願招喚の勅命を聞くことが、そのまゝ彼が進むべき白道を發見することであります。現實より淨土への門が開かれて、はつきりと確かな歩みをはじめて行くのであります。

然らばその勅命の眞意を味つてゆきます。

汝

どちらに行つていいか、わからずに困り困つてゐる旅人の胸底に、行詰つて三定死をみつめた旅人に、『汝！……』の聲はかけられてあります。汝、とは一人稱であつて、汝等と二人稱ではない。さうです。信仰は一人の世界である。絶對孤獨の世界に生れる事實である。『一切衆生よ！』それは佛敎の哲學である。それが私の上に事實となつて燃ゑて來た時は、我等ではない、一切群生を代表し、一切群生を荷負せる我一人である。抽象されたる一人ではなくて、現實の具体的の一人である如來によびかけられる我は決して漫然と横たはる我等でもなければ、生死の苦海からきりはなされた一人でもない。生死界底に見出されたる我である。いいえ今少しはつきり云ふならば、如來の招喚こそ、其處にこの『汝』としての我をはつきりと生み出すのである。如來の光明によらずして我等は『汝』である我、一人なる目覺めたる我を發見することが出來ませう。

『彌陀の五劫思惟の本願をよく〳〵案ずれば親鸞一人がためなりけり。』と云つた聖人の述懷は、眞に宗敎的自覺の鮮かなる告白であります。その親鸞一人とは決して、昨夜私は一人歸つた等云ふ時の一人ではない。一切群生を代表せる全人としての一人であり、自覺されたる一人である。多くの求道者が、常に說法を聞きつゝ、決定心を得

ることが出來ないのは、この汝の世界が自覺の天地であるためであらう。我は決して生死界と別個に存在する者ではない。社會ときりはなされた一個人ではない。悲喜苦樂もそれは、一切群生と共なる天地においてである。

蓋し、合掌して如來の勅命に聞く時の『汝』は、決して單なる我ではない。法藏の願心と共なる我である。法藏は、一切群生の限りなき罪障を一身に荷負して十方諸佛の光明の廣野にむかつて合掌し、思惟し、修行し。成就する。『汝』の勅命によつて生れたる我は、すでに生死にいたずらに迷へる我ではありません。唯一なる白道と一体なる我であります。

その汝とは一体何者であるかとたづねてゆきます。それには愚禿鈔の下卷を開いて聖人のみ教に聞かねばなりません。愚禿鈔には

『汝の言は行者なり

これ即ち必定の菩薩となづく

龍樹大士の十住毘婆娑論に曰く、即時入必定となり

曇鸞菩薩の論には、入正定聚之數といへり

善導和尚は、希有人なり、最勝人なり、妙好人なり、好人なり、上々人なり、眞の佛弟子なりといへり。』

これだけの説明が入れてあります。行者といひ、必定の菩薩だとは、聖人の御自釋であり、他の三祖のみ云葉をひいてこれに裏書きせられたのであります。

『汝……』の勅命が、衆生の上にとゞきます。その私の心の底にとゞいた汝のみ聲は、こゝに『汝』を生みます。この招喚の勅命を受けたる者は、決して單なる衆生ではなくて、救はれたる衆生であり、さめたる衆生であります。

汝……とよびかけたまふ勅命の中に我を救ふ力があります。凡小の僞惡雜善のはからひが我等を救ふのではない。よろこびや、安心や、善や、惡や、化粧や、お行儀や、稱名や、其他あらゆる凡小の自力小我の計度が私を救ふのではなくて、如來の

勅命が救ふのであります。汝とよびかけたまふ勅命、南無阿彌陀佛の中に我等を救ふ力が具足されてあります。ですから『汝』は單なる汝ではなく、如來の本願力と一つなる汝であります。

眞に汝の勅命を聞く者は、宿善開發したる者であり、一度眞に、勅命にふれた者は尋道直進する行者であります。ですから先づ、汝とは行者であると申されました。單なる人ではなくて、念佛の行者であります。よばれたる者は、歩みます。尋道直進いたします。至高絶對の聖それ自身である如來から、『汝』とよばれ、其の汝の自覺を得たることは、最高の價値、絶對の値打に目覺めてゆくことであります。ですから其つぎには、『必定の菩薩』であると申されのであります。これは決して、凡夫でなくなつたのではありません。『有漏の穢身は變らねど』變らぬまゝに如來の意志が我等の靈肉の上に、はたらきかけ、顯現れて下さるのであります。如來の全生命が、我等の上に廻向せられ、我等の上に如來の全功德を体認してゆくのであります。ですから炭に火がついたように、炭そのものゝ本質は依然として炭素でありますが、火が炭を火とするように、佛心が凡心を聖化して、このまゝに救ふて下さるのであります。誠に汝とは聖化せられたる我であります。如來の勅命に價値づけられたる我を發見してゆくのであります。如來の勅命のみが、私を必定の菩薩に値打づけて下さるのであります。

み法に生きる者の益を、龍樹菩薩は、十住毘婆娑論の中に、『即時入必定』と申されます。勅命を受けた其時、即時に、必定に入る、必定とは、佛になることに間違ひのない身に定まることであります。

曇鸞大師は、淨土論註の中に『入正定聚之數』、正定聚の數に入ると申されました正定聚とは邪定聚、不定聚に對する云葉であります。邪定聚とは、自分獨りぎめで、全く自力の散善によつて、眞實の淨土に生れて行かうとする邪見憍慢の衆生のことであります。如來の招喚を聞かず、人間の善をはげんで宗教價値を創造しようとする、

おのれ知らずの人であります。不定聚とは、如來と我とを全々相對的な對立にして、稱名念佛等の、はからひによつて我と如來とを一つに結ばうとする人たちで、念佛でも澤山稱へられたり、よろこびでもある時は、如來と一つのよういに思ひ、功利的な心をはなれず我をはなれることが出來ない、定まつた世界のない人たちであります、これも如來の勅命を聞かず、佛凡一体の救ひを体得しないからであります。定まらぬ心は、わからぬ心であり、眞に我を知らず、如來を知らぬ心で、徹底した安心もおちつきもないのが當然であります。十八願の救ひは、如來の本願そのものが、衆生のうへに顯現して『信樂』となつたので、我の機と、如來の法とは一体、即ち機法一体でありますから、信は直ちに佛心そのものであります。

善導大師は、念佛の行者を

希有人なり
最勝人なり
妙好人なり
好人なり
上上人なり
眞の佛弟子なり

と申されました。言葉を極めて嘆美せられたのであります。かうした嘆美に相當するのは、如來によつて『汝』とよばれる、其招喚の聲にさめた者のことであります。

一心

『汝……一心、正念……直來……』

汝のみ言葉がすみましたから、次には、一心正念の御心持を味つてゆきます。如來のみ心は、『汝……來れ。』であります。それは久遠の親心たる佛の願意が如來にかへれ、佛心にかへれ、親心に歸せよであることの表明であります。その『汝

……來れ。』とは、何を意味するかの問題に對して、一心と、正念と、直ちに、との三つの言葉を入れてはつきりさせてあるのであります。

愚禿鈔には、

『一心と云ふは眞實信心なり。』

と明らかに説明せられてあります。このお釋を味はふ前に一心の語源にさかのぼります。

一心と云ふみ言葉は、天親菩薩に出ております。有名なる偈文

『世尊我一心　歸命盡十方
無碍光如來　願生安樂國

『世尊よ我は一心に盡十方無碍光如來に歸命し、安樂國に生れんと願ひまつる。』この偈の一心のみ云葉は、親鸞聖人を非常に動かしました。ですから信卷には『一心華文』と嘆せられてあり、信卷には、本願文の至心、信樂、欲生の三心とこの一心との關係、即ち三心一心の問答が其中軸をなしてゐます。

蓮如上人は御文の中に、常に『一心一向に』との言葉を繰返されてあります。

二心なきこと

一心とは一体如何なる心を意味するのか、いよ〳〵それを味つてゆきます。

先づ、第一に一心とは二心なきことであります。眼病を藥師如來に、家運をお大師に、海運の無事を金毘羅さんに、後生を阿彌陀さんにと云つた式に、多神教の迷信から出ることの出來ない人たちがあります。これらは一心ではありません。決して眞に宗教的に自覺したのではなく、功利的な迷ひが勝手な神佛を作り出してゐるのにすぎません。信仰の對象は一つしかあるものではありません。それは全人格、全我を救ひ目覺めさせて下さる本尊だからであります。この合掌の對象を直にはつきりと認識する者は智慧であります。眞の智慧は佛智であります。佛智が我の全体をさまして、本

尊を本尊として歸命禮拜せしめます。その智慧の眼こそ、本尊そのものゝ廻向であります。こゝに聖人の唯一の如來があつたのであります。盡十方無碍光如來、即ち南無阿彌陀佛は實に、智慧と慈悲との絶對者にてまします。この智慧が我等をさまして我等を救ひたまふ光であります。

この光によつて自己自身の眞相にさめ、如來の本願を信知せしめられた心こそ一心であらねばなりません。二心でないこと、それが救はれた心であります。一心でなくてどうして力がありませう。一心である時、人は迷ひません。一心とは生きてゆく二つの道を持たぬことであります。一心の前にのみ尊い世界は成就されてゆきます。

うたがひと信

第二は、一心とは疑ひのない心であります。

疑ひは救はれぬ心であります。世には、疑ひを晴れよ。信せねばならぬ等と云はずに、他力ならば、このまゝどうもせずに救つてくれたらいゝにと云ふ人があります。しかしそれは救ひと云ふことの本質を知らぬからであります。救ふと云ふこと自身が心の世界の事實である以上、救はれてゐない心の相と、救はれてゐる心の相とある筈です。救はれてゐない心の相をうたがひと云ひ、救はれた心の相を『信』といふのであります。

一心とは實に救はれて、うたがひのない心の事實であります。まことに、うたがひこそ、久遠の靈の故郷たる涅槃と、久遠の親たる如來とを我より隔離するたつた一つの金城鐵壁であります。この大きな堅いへだての城を粉碎されないことには決して救はれたのではありません。このうたがひは、無明であり、我であります。このうたがひが打くだかれた時、我等の心中には、『眞實信心』が生れます。

ですから、一心と云ふは『眞實信心なり』と申されたのであります。一心とは眞實の信心であるとは徹底せる御釋明であります。

眞實信心とは、御本願文で云へば、至心、信樂、欲生の三心。この三心即ち一の信樂そのものであります。即ち、如來の御本願そのものが我等の心中に廻向顯現されたのであります。

噫。信よ。一心よ。大悲招喚のみ聲は。水火二河を前にし、群賊惡獸の惡心においたてられた我等の心中にとゞいて來た。行者はこゝに一切の疑念をはらはれて、一心に救はれてゆます。（つづく）

諸法無我

住岡狂風

今や尊い一生をおはつて涅槃の雲におかくれあそばそうとする釋尊のみ側に。大衆がつめかけて最後の御說法を聞いてゐる。諸の比丘たちは佛にむかつてお問ひ申して云ふた。

『世尊よ。佛はさきに諸法は無我である。汝等よこの諸法無我を學ぶがよい。若しこの無我を學ぶことが出來たならば、即ち我の想を離れることが出來る。我が想を離れたならば、即ち憍慢をはなれる。憍慢をはなれることが出來たならば、涅槃のさとりを得ることが出來るとお說き下さいましたが、その意味は如何でございますかお敎へ下さいませ。』とお問ひ申した。

佛は諸の比丘たちに告げて申されるよう

『善い哉、善い哉、汝は今、自ら疑を斷じようとして、能くもこの義を問ふた。』

とおほめになつて次のように物語りをせられる。

譬へて云ふならば、こゝに一人の闇鈍なる國王があつた。そしてその愚なる王に任へてゐるこれまた、ものゝわからぬ片意地な醫者があつた、王はこの愚なる醫者に厚い俸祿を與へてゐた。

この醫者は、どんな病を治す時にも純ら乳藥を使つてゐた。この病氣は何が根でおきてゐるのかそれを知らない。藥といつて知つてゐるのはこの乳藥だけである。風をひいた病人であらふか、熱患者であらふが、腹痛であらうが。一切の病にたゞ乳藥を服することを命じた。この醫者を使つてゐる王は勿論、醫乳の好い惡いを知らう筈がない。

こゝに一人の明醫があつた。八種の術をさとり。善く衆病をなほし、諸の方藥を知つてゐる。この明醫が遠方からこの國に來た。

愚なる醫者は敎を受けることを知らなかつた。それどころか反つて輕蔑憍慢の心を生じた。この時名醫は禮を厚うして舊醫に求めて師醫となつて貰ひ、醫方の秘術を体得しようとして云ふには

『私は今、あなたにお願ひして師匠になつていたゞきました。どうか私のためにお宣べ下さい。謹んでその敎を聞くでありませう。』

すると憍慢にして愚なる舊醫は

『君よ。若し能く精出して四十八年間私に給使するならば、その後に醫術の秘法を敎へるであらふ。』

明醫はそれを聞いて誓つて云ふには、

『私は、仰せの通り致します。出來るだけの力をつくして走使のつとめをいたします。』

或日愚なる醫は客醫をつれて王の所に出た。この時明醫は王にむかつて、種々の醫方、及び其他のことについて詳細に說いた。その時王はこの明醫の話に感心して、舊醫の愚かであることを知つて、國外に驅逐つてしまつた。さうして益々明醫を恭敬ふことが厚くなつた。その時彼は『王を數へようと思へばこの時である。』と思ひかよ

うに云つた。

『大王よ。若し私々眞に愛して下さるならば、一つの願ひをお聞き下さい。』

『何でも與へる。この右の臂でも余が体でも……。』

『いゝに大王よ。私は何も求めは致しません。唯求むる所は、國内に宣令をお出し下さい。それは今から後は、かの舊醫の敎へた乳藥を服してはならんと云ふことです。この藥は毒害傷損が多いが故に、若しなほ服する者は其首を斬るぞとお命じ下さい。乳藥を使ふ者がなくなつたならば、横死する人がなくなるでありませう。私の願ひとはこのことです。』

この命令は直ちに國内にしかれた。

明藥はそれからは色々な藥を調合したが衆病の治らない者はなかつた。

久しからずして王が病氣になつた。かの明醫はその病氣を診察して王にむかつて云

つた。

『大王の病氣をみましたが、この病氣には、乳藥を使はねば治りませぬ。私は先きに乳藥を使ふことを禁じましたが、あれは實語ではありませぬ。今若し乳藥を服用なさればこの熱病は全快致します。』

これを聞いた王は驚いて怒つて云ふには、

『汝は狂者になつたのか、この熱病が乳を服すればなほると云ふ。汝は先きに毒といつたではないか。一体我を欺かんとするのであるか。先きの醫者がほめてゐた所を毒と云つて、彼を國外に放逐さしておいて、今は乳藥がよいと云ふ。舊醫の方が汝よりましだ。

『大王よ。お待ち下さい。虫の中に、木を食ふて、其食ひあとが字の形を殘す者があります。この虫は字になつてゐるか、どうかを知つてゐるのではありません。智人は決してこの虫が字を知つてゐるとて驚きは致しません。大王よ。舊醫も亦

さうであります。彼は病氣が何であろうと、病氣でさへあれば乳藥をすゝめます治つた所で、虫の字を成すと同じであります。彼は乳藥の善惡を知つてゐるのではありません。』

『知つてゐないとは何をか。』

『この乳藥はこれ毒害か、この乳藥はこれ甘露であるかを。』

『如何なる乳が甘露か。』

『乳牛に、酒糟、滑草、麥のふすまなどを與へず、放牧する所が高原でなくあまり濕つた所でなく、常に清水をのまし、あまり走らせず……かようなことに氣をつけた牛から取つた乳藥はよく諸病を治す甘露であります。

王の怒はとけた。さうしてほめて云ふには、

『大醫よ。善くわかつた。今日はじめて、乳藥に善惡あることを知り、之を明かにして病を治すことが出來た。それでは國内に宣令を出すであらふ。今より後、乳藥を服してもよいと。』

この王の命令を聞いた者は、瞋ってしまつて、かう云つた。

『大王は今、惡鬼にとらへられてしまつた。まるで狂者だ。我等をたぶらかして復乳を服しめる。』

一切人民は恨みを懷いて悉く王の所に集つた。王は云つた。

『汝等は我にむかつて瞋恨を持つてはならぬ。服せよといふも醫教、服してならぬと云ふも醫教である。我がとがではない。』

人民たちは皆歡喜して、いよ／＼この明醫を敬ふやうになつた。

如來は大醫王になつて世に出現し、一切の外道、邪醫を降伏したまふのである。

『我醫王となりて、外道を伏せんと欲す。』とは佛のみ言葉である。佛は一切は無我

だと教へる。然るに諸の外道が我をたてるのは、虫が木を食ふて偶字を成すのと違ひはない。この故に如來は、唱へて無我と云ふのだ。これは衆生を調へんがためであり今の時を知るが故である。我等は皆、因縁によつて出來たものであるから、佛が『我有り』と云つてもそれは彼の良醫が、乳の善惡を知るやうなものである。

凡夫や愚者は說いて、我が魂は大いさ拇指の如しとか、芥子の如しとか、或は微塵の如しとか云ふそんな固定した我があるのではない。如來の我を說くのは、それとはちがふ。こんな間違ひを正すために、『諸法無我』であると說く、

實は無我ではない。

然らば何ものが眞の我であるか。と云へば、佛性こそ、實であり、眞であり、常住である。これが眞の我である。

如來は大醫が乳藥を解するが如く、衆生のために諸法無我を說きつゝ、又眞實に我ありと說くのである。汝等よ。かくの如く法を學ばねばならぬ。（涅槃經哀歎品）

釋尊が「大我」ありとお說きになつたのは、涅槃のことであり、眞如のことであり如來のことであり、慈悲心のことであり、智慧のことであり、佛性のことであり、信心のことである。

無我とお說きになつたのは、小我のことであり、因縁によつて出來たものゝことであり、變るものゝことであり、生死のことであり、迷ひのことであり、煩惱のことであり、我等の執着する肉体のことであり、感情のこと、思ひのこと、全て亡びてゆくものゝことである。

私どもは亡びる者を亡びると知らず。永遠なる者を永遠のものと知らない。其處に悲しい凡夫の顚倒の不用生活がある。

釋尊が、無我を敎へられるは、常住なる如來を知らせんがためであり、如來に敎は

れて、亡ばない信の火を我等の上に燃したいためである。

みんな亡びる。諸法には永遠の我はない。たゞこの亡びる靈肉の上に、廻向せられた信の火だけは、永遠に燃ける。

おゝ永遠よ。淨土よ。眞實よ、光明よ、救濟よ、感謝よ、懺悔よ、大道よ、精進よ合掌よ、解脫よ、歡喜よ、大樂よ、淸淨よ、大安心よ、正念よ、正定よ、全て如來の中にのみ見出される。

如來はこれ生死を超にて靈存ます。

しかも我等の上にあつては、如來の全生命、信の火となりたまふ。信をおいては、千言萬語も唯單なる空言である。

舍利弗と目連（四）

入滅

或日、舍利弗は禪定より出でゝ、思ふよう『自分はこの七日の間に、世尊に先立ちて涅槃に入るであらう。けれども摩伽娑の里に殘されてある母は、未だ佛法に歸依して居られぬ故まづ、里にかへりて、その母を導き、道に入らしめ、然る後、靜かに、涅槃に入るであろう』と、やがて世尊のみ許に詣でゝ、その旨を宣べ許しを請ふこと三度、やうやくにして世尊のお許しを得て後最後の別れに、今一度比丘達の爲に、み法を宣べるやうにと、世尊の仰せを受けて諸の神變を顯はし、世尊を禮し奉つて衆の前にみ法を說きました。

かくて舍利弗は世尊の前に恭しく跪き、合掌禮拜して最後の稽首を捧げて御許を辭

した。

あまたの比丘達は舍利弗尊者に最後の供養を捧げんために、花と香とを持ちて隨ひます。けれども舍利弗はこれを止めて云ふやう「汝等は、もう私に供養しおはつた。私の一人の沙彌が私を供養すれば充分である。汝等はかへりて、道を思へ、如來の出世にあひまつるは難く、又人となりて信を得、家を出でゝ法を學ぶことも甚だ難い。比丘等よ。もの皆は無常である。苦、無我である、涅槃のみ、永に寂である。汝等善くこれを念へ。』と比丘達はこれを聞き皆涙にむせびました。

かくしてその日、夕暮れに近い頃、舍利弗は、那爛陀の村なる摩伽娑の里に着きその家にかへり内に入るや遽に病が重くなつて來ました。母はおどろき、其室を退きましたが、諸天は恭しく舍利弗の病を看護します。母は不思議に思ひ舍利弗の弟子拘頭にその譯をたずねました。チャンナは答へて尊者のみ德の尊い事を知らせました。母は驚いて「私の子さへそのように尊いならば、世尊はどのやうに尊くましますであろう」とその歡喜が胸に溢れるのでした。

これを聞いた舍利弗は母に道を語るべき時のいたれるをおもひ、世尊の德の尊きことをさとし「世に德と智とにおいて、世尊に勝れるものは一人もありませぬ」と進んでみ法を說けば母は大いに嬉びて、そのみ法にあひ奉り得た日のおそかりしことを惜しみました。

舍利弗は今初めて母の恩に報ゆることを得て、共に喜びました。

やがて、曉に近い頃、舍利弗は其前に集へる比丘達に四十四年間、共にありしその恩をのべ、偈を說いて云ふやう、

なおざりならず
覺りをひらけ
これ我が敎なり

いざ我涅槃に入らん
我はすべてより
解脱を得たり。と

その夜滿月の光清き夕べ、舍利弗は母の詐に伏し烈しい苦しみに斃はれ、遂に曉に近かづきて靜かに涅槃に入りました。

後七日の間、種々の供養をたむけられ、その遺骨はチヤンナの手によつて、世尊の座下に持歸られました。

これをみた阿難は涙にむせびつゝ、世尊のみもとに到つて『私達は舍利弗の滅土にあいまして心も亂れてしまひました』と申し上ぐれば、世尊は宣まふやう、

『阿難よ。心をなやましてはならぬ。長ねに存在せぬものを、長ねに在らしめやうとするのは無理である、過去の諸佛ですら去りたまふたであらふ、もの皆は無常である。生あるものは必ず死に逝く。たゞ生ぜず、又滅せずと云ふ、涅槃の世界、その滅こそ、最も尊いものである。少しも悲しむべき事ではない。』

と、その遺骨を阿難の手より受けられ、之を掌にのせ諸の比丘を呼び仰せらるゝには、

「比丘等よ。これは數日前迄、汝等の前に諸の神變を行ふてゐて舍利弗の遺骨である彼は久しく德を修めて己れを完うし諸佛の如くみ法を說いた。人々は彼に隨つて敎を聞いた。彼の智は大きく圓滿にして其心敏くして透徹つていた。彼は欲少く靜寂を樂み、惡を斥けて爭を避け、戲論を好まず、その道を弘むる爲めには大地のやうに厚い志を有つてゐた。比丘よ。よくこの賢い法の兒の遺身を見よ。」と

かくして世尊は舍利弗の爲めに吠舍離の門近くに一つの塔を建て給ふたのでありました。

舎利弗の涅槃に入りて日尚淺く目連も亦、續いて滅土に入りました。

かねてより尊者目連の德の高きことをねたみ奉つてゐる裸体外道の郡が王舎城のほとりに住んでゐたのでした。

あるときは目連がある山の洞の中に住んでゐたので、二度迄襲はれたけれども二度ともこの難をのがれることを得ました。然るにこの日、目連が託鉢に出かけましたところ、裸体外道がまた襲ひ來つて目連を圍み、遂に捉へて瓦石をもつて打ち倒した揚句、彼を路傍の草の中に投げこんで去つたのでした。目連は骨摧け肉爛れて痛みに堪へ難く終に此處において涅槃に入りました。

このことが城中に傳はり、阿闍世王は直ちに裸体外道を死刑に處した。

比丘達は深く悲しんで「何故に目連はかような悲慘な死を遂げたのであろう」とあやしみました。

世尊は比丘達に諭し給ふようには、

「比丘よ。目連は前世において、その妻に唆かされて老ひたる盲ひの父母を森に誘ひだして殺したる後、その屍を叢のに拋つてしまつた。その報により彼は久しく地獄におちて苦しんだが、今又最後にこのやうな死におうたのである。」と

かくて世尊は目連の爲めに、亦竹林園の門のほとりに塔を建て給ふたのでありました。

更に世尊は比丘等をみそなはして宣たまふやう、

「比丘等よ。舎利弗や目連のこの世に在つた時、彼等の巡つた所の人々は二人の巧みな方便により佛の道に入ることを得て皆幸福をうけた。それは二人ともよく外道異學を降すに堪へる力があつたからである。然るに今、汝等の中にこの二人を見ることが出來ない。實にこの教團は大なる損失をした事である。」と

世尊はこの上足の弟子二人の德を讃へ且つ入滅を惜しまれるのでした。(完)

大野支部　更地地方の……

聖なる集ひ

……各地に續々實行下さい……

九月の第四土曜日には三十二人といふ大人數でありまして、座談もはずみ、みんな大滿足で御座いました。いづれどなたかにお出でを願つて御指導を受けたいと思つてゐます。會の樣子を申上げます。

一同佛前に合掌念佛して後、圓形に並びます。誰か中心人物を一人きめまして司會者とします。司會者の命によつて、一同冥想沈默一分間、それから次に合掌宣言及び本領を一同拜讀します。

次に中心人物が、卷頭の叫びを拜讀、一同は冥默して聞きます。一同光明雜誌を開いて十四頁の「法句」それから「幼き日の追憶」「美しいもの」と順々に一句づゝ一人が拜讀して次ぎに移ります。

次ぎに足が痛くなりますので、輕い体操をします。これからは感想發表、餘興、唱歌、と極めて自由な會になります。そして最後に團歌を合唱して後、冥想、合掌

ざつとこんな順席で御座います。まだ光明雜誌が行き渡つてゐませんので、二人で一冊宛持ちました。中丸主計樣、栗森先生等が中心で御働き下さいます。ほんとに本部員の方々にお會ひしたようななつかしい會でありました。御年寄の方までが大賛成で家を開放して熱心にお集り下さつたには、何とも云へない嬉しさを感じました。先きのことを誓はずに、會合の度毎が最後であり、最初であるといふ心持でと皆さんも申されます。

どうか一度御主張下さつて、御指導を願ひます。あまりの嬉しさに御報告申します。

◆

各地にこの「聖なるひを」續々おはじめ下さい。十人位ひづゝ各地で讀者のある

地方では、これにならつて御はじめ下さい。もう以前から實行してゐる支部もあります。支部のない地方でも、どうか中心人物になつて、こうした心からなる集合が生れますよう。

本年は十一月に御大典が行はれます。一番いゝ御大典紀念事業です。初じめた地方はそれ〳〵本部へ御報告下さい。誌上に發表します。各地團員の奮鬪をお願ひします本部から指導員派遣の必要がある時は、申込み下さい。全て本部が責任を持つて派遣いたします。

講演豫定

十月 ⊙四日——七日、豊田郡河内町支部 ⊙八日——十日、蘆品郡宣山村 ⊙十二日——十五日、福山市 ⊙十九日——二十一日、福山宗教講座 ⊙二十二日——二十三日、深安郡千田村 ⊙二十四日——二十五日、仝 郡市村支部 ⊙二十六日——二十七日、仝 郡川口支部 ⊙三十日——三十一日、仝 郡萬能倉歡喜庵

十一月 ⊙一日——三日、本部例會 ⊙四日——七日、佐伯郡大野村

御大典！

秩父宮殿下御結婚……お國の上には瑞雲たなびいて、よろこびの聲内外にみつ、其年！ 十二月 一日 二日 三日、

我光明團の十週年大會來る！

來れ！ 集れ！ 懐しの大會へ！

大日本眞宗 光明團十週年大會

大きな希望と抱負が彼の胸にもゆる！

十週年にあたり彼は何を云ひ何を叫ばんとするか。

總動員の聖戰。來れ。助けよ。若き光明團のために。

彼は今臥薪嘗膽の十年間、養へる力をためさんとす。

廣島市へ！……廣島市へ！……

（詳細は十一月號に）

主管連續宗教講座

第一輯

釋尊の成道

いよ〳〵出づ！

主管が四日間、福山市連續宗教講座で第一回にしたものが漸く出來ました。先づ釋尊の成道に出發して、ふかい宗教的意義をたづねてゆきました。如何にして大聖は生れたか、成道とは何か、根本佛教は何を說かんとするか、如來とは何かを說き、ひいて親鸞聖人の世界をのぞきかけてゐます。皆樣をきつと滿足さすあるものが存在することを信じます。

お願ひ

一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をはつきりお記し下さい。

一。轉居通知は新舊兩住所を書いて下さい

一。誌代拂込は振替を御使用下さい。切手は使ぬようにして下さい。やむを得ぬ時は五厘か貳錢切手に限ります。

一。文字をはつきり正確にお書き下さい。

一。主管に特別の用事の外申込中止送金等は一切事務宛に御送附下さい。

一。誌代前金切の時はどうかお早く御送金を願ひます。お困りのお方は其旨御申越し下さい。

本誌定價

一部　金十錢（郵稅共）
一ヶ年　金壹圓貳拾錢（郵稅共）

昭和三年十月十日印刷
昭和三年十月十五日發行

編輯兼發行人　花岡靜人
印刷人　佐々木温三
印刷所　光明團印刷部

廣島市八丁堀二十六番地
發行所　大日本眞宗　光明團本部
振替貯金口座下關貳參〇八番